

暮らす旅 京都

楽しいお茶

文／松岡伸吾（暮らす旅舎）



おちゃばーでは抹茶ビールも点てた 写真協力／studio Bow



陶々舎の初代メンバー3人



月1回通っている稽古場



「京都はお茶でできている」（青幻舎）

お茶を習いに毎月京都に通って2年が経つ。

半年前から週1で合気道も始め、ようやく技の名を覚えたくらいだから、自主練なしの月1のお茶では遅々として進まない。

ただお茶も合気道も稽古はとても楽しい。

還暦を過ぎて和にはまるのは、「保守回帰」「先祖帰り」と言われても仕方ないが、きっかけは暮らす旅舎の本だった

この本は、お茶の聖地大徳寺そばの日本家屋に3人で住む陶々舎と名の若い茶人との出会いから生まれた。

茶道といえば「足が痺れ、堅苦しい」というイメージで、実際、各流派が各々の作法によりそれぞれのヒエラルキーを作り上げている。

江戸時代は大名が支え、明治維新を経て実業家がスポンサーとなり、戦争未亡人の生計を支える嫁入り道具の稽古事として茶道は生き延びた。かつて利休が創造した前衛芸術としての茶道。だがその形骸化は大きく進んだ。

しかし今日硬直化した茶道に、陶々舎をはじめ、若い世代が新たな息吹を与えつつある。

「茶室や型、作法という形で、茶の湯を冷凍保存した『流派のお茶』。それゆえに残ったが、解凍するのがこれからお茶をする人の役目」と陶々舎の1人が語った。彼らはお茶に血を通わせるべくさまざまな茶会を考案する。

鴨川でお茶を点てたり、銭湯と茶会をつなげた「茶と湯」で室町時代の茶の湯を再現し、お酒にお茶を抽出し「おちゃばー」を開いた。

取材中「何年もお茶を稽古していたけれど、初めてお茶が楽しいと思えた」と話す女性に何人も出会った。お茶のルネサンスを実感したことで、お茶を始めようと思った。